

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320093

研究課題名(和文)多言語辞書と金属活字印刷から探るキリシタン文献の文字・語彙同定の過程

研究課題名(英文)Identifying vocabularies of the Japanese Early Christian documents by multi-lingual dictionaries

研究代表者

豊島 正之 (TOYOSHIMA, MASAYUKI)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：10180192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,800,000円

研究成果の概要(和文)：16～17世紀にキリスト教布教に伴って印欧語と系統的に無関係の言語とが初めて接触する。この過程を言語学史として扱う「宣教に伴う言語学」の情報資源の整備は進捗が著しいが、それらを統合して扱うための基礎研究、中でも「語の同定の問題」の研究は著しく不足している。本研究は、「時代別国語大辞典データベース」のようなこれまでに構築した情報資源も活用しながら、当時のポルトガル語の異綴りの同定、日本語漢字表記語彙の同語彙表記・異体字の同定の問題を、対訳文献という他には無い特徴を生かし、情報資源の構築を進めつつ、その同定の原理を明らかにしようとしたものである。

研究成果の概要(英文)："Missionary Linguistics" is a new branch of the history of linguistics, focusing on the first contacts between the Indo-European languages and the non-IE languages, such as Konkani (Dravidian) and Japanese. Information resources (e.g. databases) of the Missionary Linguistics are recently abundant, but because of the lack of autography and de facto standard vocabularies in those days, words are hardly identifiable, and thus statistical approaches are difficult. This project takes advantage of the multi-lingual dictionaries and side-by-side translations of the Early Christian Documents of Konkani and Japanese, for establishing identification methods of the words, and KANJI representations.

The project starts on the basis of already constructed databases (by the project leader), makes linkages between these databases, especially making use of the KANJI-script transliterations, which are identifiable both in Latin transcription and Japanese native writings.

研究分野：宣教に伴う言語学, Missionary Linguistics

キーワード：宣教に伴う言語学, Missionary Linguistics, キリシタン文献, キリシタン版, コンカニ語, Konkani, 多言語辞書, 金属活字印刷

### 1. 研究開始当初の背景

代表者らは、アジア各地の「宣教に伴う言語学」(Missionary Linguistics)による言語記録、とりわけ日本のキリシタン文献、及びインドのコンカニ語文献に、系統の異なる言語の邂逅に於ける言語研究の記録として着目し、過去数十年に亘って共同研究を進めている。

キリスト教宣教に伴って 16~17 世紀に作成された布教対象語の研究書(辞書・文法書)及び宗教書(教義書・修徳書等)の研究は、ラテン文法と全く系統の異なるアジア・アフリカ・南米諸言語との最初の言語学的邂逅の記録として、「宣教に伴う言語学」(Missionary Linguistics) という言語学史の新領域を形成しており、21 世紀での研究の進展がめざましい。Missionary Linguistics 国際会議も 2003 年の第一回オスロ会議から順調に回を重ね、研究開始時点で最新であった第 6 回(2010 年 3 月)は、代表者ら(豊島・岸本)が東京で主催して、過去最大 18 箇国からの参加者を得て成功裡に終わった。

この 2010 年東京会議で各国の研究者が一致した認識を示したのは、研究の基礎である 16~17 世紀の原典類の機械可読形式での情報資源の共有の著しい遅れが国際的共同研究の障害である事である。研究開始当初、代表者らは、次のような情報資源の構築を共同で進めていた。

1) ポルトガル語・ラテン語に対するローマ字表記日本語、及びコンカニ語の対訳辞書

平成 17 年度~18 年度 科学研究費基盤研究(B)にて、キリシタン対訳辞書の情報資源構築を行なった。コンカニ語関連の成果は、出版物の他、<http://joao-roiz.jp/KONKANI/> で公開。

2) キリシタン版「ラポ日対訳辞書」の原典

代表者の一人岸本は、公表済の論文で、日本キリシタン版「羅葡日対訳辞書」の原典カレピーヌスの版本分類を行ない、日本版の原典系統を初めて解明し、原典本情報資源との対比による日本版編纂過程の考察の手法を開拓した。

3) 日本キリシタン版の「国字本」(漢字仮名交じり文)の金属活字製造に伴う語の認識

代表者(豊島)は、キリシタン版国字本の前期・後期の別が、その金属活字が欧州製(即ち漢字追加不可)か日本製(漢字追加自由)かの差に拠る事を初めて明らかにし、金属活字印刷に伴う漢字語彙の制約を計量的に示した。代表者の一人白井は、仮名連綿の情報資源を構築して連綿活字の出現環境を精査し、「語」認識が仮名連綿活字の製造・用法にまで及ぶ事を示した。

更に、代表者(豊島)は、平成 21 年度日本学術振興会「先端学術研究人材養成事業」の「大航海時代の「宣教に伴う言語学」研究のため

の非一極集中型研究環境の構築」(代表者豊島)によって、世界各国から招聘した若手研究者と共に、「宣教に伴う言語学」の国際的な分散データベースの構築試行・国際的共同研究の試行をかつて無い規模で行ない、「宣教に伴う言語学」の情報資源の構築・共有・国際的な研究者コミュニティ醸成に努力した。

代表者・分担者による、こうした研究活動によって、「宣教に伴う言語学」の研究用情報資源は、研究開始当初から、既に構築の途にあった。

### 2. 研究の目的

本研究は、急速に進みつつある「宣教に伴う言語学」の情報資源の整備に対して、それらを統合して扱うための基礎研究、中でも「宣教に伴う言語学」の時代の「言語単位の同定の問題」の研究が著しく不足している事を問題視し、その問題の解決のために、ラテン文字とは異なる文字を持つ日本キリシタン文献を素材として、実際に情報資源の構築・それらの資源間の同定を試行する事を通じて、「語の同定」概念に迫る事を目的とした。

上述(「研究当初の背景」)のように、「宣教に伴う言語学」分野の研究用情報資源は急速に整いつつあったが、その多くが単目的の資源構築であり、それらを統合した計量研究には依然として多大の障害があった。一例を挙げれば、当時(16~17 世紀)のポルトガル語には安定した正書法・分綴法が無く、同語・別語の認定が一つの出版物・辞書中に於いてすら揺れており、日本対ポルトガル、コンカニ対ポルトガル等の異なる対訳間では甚だしく共通性を欠くため、対訳言語(ここではポルトガル語)をキーとしての計量は、語の同一性の認定次第で大きく結果が変わり、信頼性の確保が難しい。(最大のキー言語ラテン語ですら、程度差はあれ問題が残る)。この「宣教に伴う言語学」での「言語単位の同定の問題」が当該キー言語(ポルトガル語等)単独の研究では解き難い事は、上記の「宣教に伴う言語学」東京会議に参加したポルトガル語・スペイン語のネイティブ研究者も認めた処であって(彼等の本国でも、そうした研究プログラムは未進捗)、代表者らは、当時の「言語単位の認識・同定」の研究は、キー言語だけでは不十分で、対訳対象の日本語・コンカニ語等を含めた統合的な研究が必須である事を再確認した。

本研究は、こうした「語の同定」の問題を中心に取上げ、ポルトガル語本については、時に大きく異なる綴字の同定のために「異綴り正規化用辞書」を構築し、日本語イエズス会キリシタン版についてはローマ字本・国字本(漢字仮名交じり本)相互一貫検索データベースを構築して相互の語の同定を試行し、併せて、「時代別国語学大辞典 室町時代編」の見出し語及び用例中の語彙(の異表記)、節用集類見出し語(の異表記)などを集成して、当時の日本語語彙の表記差を集約して、同定作業の基礎を築く事を目的とした。又、こうした

基礎資料構築の過程を通じて、そもそも「語の同定」とは何であるのかの概念の洗練を目指した。

### 3. 研究の方法

研究は、次の3件の情報資源の構築・洗練を並行して進める事で行なった。

1) キリシタン文献・コンカニ語宣教文献の諸データベース類の統合、及び必要な文献資料の増補

2) 当時のラテン語・ポルトガル語彙集及び「時代別国語大辞典データベース」等に基づく同時代日本語漢字語彙と1)のデータベースを相互に計量的に比較可能とするキーの正規化・再編

3) キリシタン版の行草体金属活字の活字レパートリ推定に基づく印刷可能漢字語彙の画定

### 4. 研究の成果

(1) キリシタン文献・コンカニ語宣教文献の諸データベース類の統合、及び必要な文献資料の増補

上述のように、既に日本キリシタン文献の日本語版本(ローマ字本・漢字仮名交じり本双方)、日本語を含む多言語の版本、コンカニ語宣教文献の主要写本・版本のデータベース(DB)類は構築済であったが、マノエル・バレト、ルイス・フロイス(いずれも日本で布教したイエズス会宣教師)の自筆本のような重要文献で且つ電子化未了のものを増補した。又、当時(16~17世紀)のポルトガル語文法書・辞書(版本)は、ポルトガル語綴り字同定に必須の情報資源であり、ポルトガルの Tras-os-Montes e alto Douro 大学の協力を得て、それらの増補も行ない、16~19世紀の文法書は殆ど全て、辞書も主要なものの初版は全てを情報資源としての構築を完了した。これらのうち、ポルトガル語文法書類は、既に研究プロジェクトのホームページ <http://joao-roiz.jp/LGRP/> から公開中である。辞書については、校正済のものから順次公開に回しており、<http://joao-roiz.jp/LGR/> から見る事が出来る。

(2) 当時のラテン語・ポルトガル語彙集及び「時代別国語大辞典データベース」等に基づく同時代日本語漢字語彙と1)のデータベースを相互に計量的に比較可能とするキーの正規化・再編

① ポルトガル語版本類・コンカニ語版本類データベース(DB)類の統合運用には正規化された統合キーが必要である。前項で構築したポルトガル語文法書類(版本)のDBからは、(文法書の保守的性格、及び文法書間の継承関係によって)、同定可能な語彙のグループが多数得られたため、主としてそれに基づいて(特に正書法未確立期の)ポ語の持つ多様なバリエーション(異綴り・異活用形・分綴変異など)のデータ正規化用辞書を作成・維持した。これに加えて、豊富なバリエーションを見出し語に持

つ Ferreira の辞書(1940~1944, Rio de Janeiro, 全6巻)の異綴りデータも、対照可能なように整備し、更に、Tras-os-Montes e alto Douro 大学の協力・助言によって、16世紀以前に遡ったポルトガル語写本データのいくつかも整備する事を得て、「バリエーション同定辞書」の構築に努めた結果、多くのバリエーションが集約可能となった。このバリエーション同定の成果は、既に <http://joao-roiz.jp/LGRP/> で運用しているが、「バリエーション同定辞書」自体は、現在も逐次改良中である。コンカニ語文献についても、同じく公開済である。

#### ②ポルトガル語写本類

自筆写本が豊富な通事ロドリゲスの写本類(マドリッド王立歴史アカデミー蔵・過年度電子化済)とルイス・フロイス、マノエル・バレトの自筆写本類も、一旦は上記の版本類DBに統合したが、その過程で、実はこれらの三者の個人言語(idiolect)にはかなりの差がある事が明らかになり(特にロドリゲスは方言がかなり異なる)、規範的な版本の辞書と混在させると運用上の混乱を招くため、取り敢えず統合を解除した。これは、言語の「位相」の問題で、研究当初には予想していなかった(これ程の差が存在するとは予期しなかった)ものであり、その解決は将来の課題となる。尚、写本類をそれぞれ検索する分には、特に支障は無いものの、一般のユーザには(彼等の異綴りに満ちた検索結果は)容易に利用出来ないと思われるため、現在は公開していない。

#### ③日本語漢字語彙・キリシタン文献国字本漢字語彙

以下「漢字(表記)語彙」とは、必ずしも漢語ではなく、漢字表記を一般とする大和言葉・他言語からの借用語類をも含む。

代表者は、過年度の度科学研究費研究成果公開促進費(データベース)により、三省堂「時代別国語大辞典」上代編・室町時代編(全五巻)をデータベース(DB)化済であり、その全文のソースデータにアクセス可能な立場にある。この辞書の見出し語、及び引用する用例から、漢字(表記)語彙を抽出し、「時代別国語大辞典」が同一見出し語として認定した情報をキーとして、日本語漢字表記語彙のバリエーション(異表記・異形態など)の正規化データを試作した。これに、古本節用集類(過年度入力済分に加えて補充入力を行なった)による補正も行なうて、正規化された日本語漢字語彙集成を構築した。更に、国字本(漢字仮名交じり)キリシタン版のデータ(過年度入力済)から漢字(表記)語彙を取り出して、この日本語漢字語彙集成との整合を図った。「時代別国語大辞典 室町篇」の見出し語約6万項目のうち、キリシタン文献の引用を含む見出し語は3万項目と半数であり、うちキリシタン文献のみを典拠とする見出し語は3千項目であって、他の典拠を圧倒しており、キリシタン文献の重要度は歴然としている。しかし、これは、全体の5%は、キリシタン文献以外に典拠が見出せない項目であるという事でもあって、果たしてそ

れが室町時代語の語彙として一般的と見られるか、疑わしいとの観点もあり得るであろう。本研究では、この問題への解決を提示するには至らなかったが、この件は更にDBの拡張によって探究を続けたい。

#### ④ 日本語キリシタン版ローマ字本と国字本との語同定

国字本キリシタン文献とローマ字本キリシタン文献の語同定のキーとなるのは、ローマ字本キリシタン文献に見える「訓注」である。

「訓注」とは、漢字語に対して、その校正漢字を一字一字ローマ字で注するもので、例えば日ポ辞書が「シャウジン」に対して「クワシウ、ススム」と注する事で、それが「精進」という表記である事を示すものである。最も詳しい「訓注」は、1591年刊のローマ字本「サントスの御作業」に見え、日ポ辞書にも豊富に見える。これらのローマ字本には、漢字は全く印刷されていないので、読者は「訓注」を便りに漢字表記を喚起することになり、そこにはおのずから、漢字用法に一定の規則性・規範性が存在した事が判明し、これによって国字本との語同定が可能である。但し、「訓注」は最大でも6千語程度しか得られず、しかも必ずしも国字本とローマ字本の語彙が対応しないため、この手法で解決されるものは、予想外に少なかった。国字本とローマ字本の語彙が対応しないのは、やはり「位相」問題と考えられ、本研究では、その十分な追究は出来なかったが、キリシタン文献に関する将来の研究への手懸りとなるであろう。

#### (3) キリシタン版の行草体金属活字の活字レパートリ推定に基づく印刷可能漢字語彙の画定

国字本(漢字仮名交じり)版キリシタン文献(キリシタン版)は、金属活字印刷であるので、その活字の異なり性の把握が(写本や木活字本に比すれば)比較的容易である。このため、単字(一字又は連綿一コマ)単位の行草体金属活字画像のデータベース(DB)を用いて、日本イエズス会の仮名漢字活字レパートリを画定した。これは、漢字(表記)語彙の同定作業の前提となる作業でもあるが、実際には、キリシタン版は「計」「斗」「弟」「第」「穀」「穀」などの活字を共用しており、それは必ずしも語彙としての同定の根拠にはならない。更に、「新」「祈」「岸」「巖」「項」「頂」などを誤認して誤植(両者の区別に気付かずに植字)した例も少なからず見出される。「計」「斗」類と「新」「祈」類の違いは、前者には(キリシタン版の漢字字書「落葉集」や、キリシタン版「日ポ辞書」の訓注などによって)、活字は共用しても語としては同定していない事の論拠が得られるのに対し、後者にはそれが得られない事を根拠として、後者は、寧ろキリシタン版独特の要因に由る誤用例として扱うべきであると結論した。

#### (4) 研究成果の公表と学界による評価 本研究で構築した情報資源は少なからぬ量

になるが、その多くは、プロジェクトホームページ <http://joao-roiz.jp/LGRP/>、<http://joao-roiz.jp/LGR/>などから、無償でアクセス可能なデータベースとして公開している。今後も、校正を繰返し、洗練を加えて、公開対象の資源を追加する予定である。

本研究の成果は、代表者・分担者それぞれが、国内学会・国際学会で口頭発表し、査読付き論文として発表した(一部は印刷中)。

研究期間中の平成25年10月には、研究代表者が編者となって、研究書「キリシタンと出版」(八木書店)を出版し、これには、代表者、及び分担者全員が寄稿した。本書は、これまでの研究成果に基づく全て書き下ろしの論考を集成し、更に論考間の相互参照のために索引を付け、要語解説・年表・キリシタン版諸本一覧などの一般読者向けの情報をも補って、キリシタン語学の最先端を示す事を意図した出版であったが、これに対し、平成26年5月に、日本出版学会より、本書をキリシタン語学についての「現時点での集大成であり、同時にスタートアップに位置づけられる論集」との要約の下、「世界中に類書のまったくない内外研究者必携の書であり、出版研究に対する功績はきわめて大きい。」との評価を受け、本書は第35回日本出版学会賞を受賞した。研究期間中に、専門学会の学会賞を受賞した事は、本研究への学界の関心が大きく、その評価も極めて高い事を示していると言えよう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計16件)

①岸本恵実,2015年,日葡辞書の優劣注記を通して見た羅葡日辞書の日本語訳、『国語国文』84巻5号,(印刷中)

②Kishimoto, Emi, 2013, Translation of anatomic terms in two Jesuit dictionaries of Japanese., Zimmerman, Klaus, Zwartjes, Otto & Schrader-Kniffki, Martina (eds.) Missionary Linguistics V / Lingüística Misionera V: Translation theories and practices, John Benjamins, Amsterdam. 査読あり、pp.251-272.

③豊島正之,2013,日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴(豊島正之編「キリシタンと出版」、八木書店、2013.10),pp.89-155

④岸本恵実、2013、キリシタン語学の辞書、豊島正之編、『キリシタン版と印刷』、八木書店、査読無、224-245頁

⑤白井純,2013,キリシタン語学全般、豊島正之編、『キリシタン版と印刷』、八木書店、査読無、199-223頁

⑥Maruyama, Toru, 2012, Estudo da língua japonesa através dos documentos deixados pelos missionários portugueses dos séculos XVI e XVII- pensando o passado e o futuro da minha investigação, Confluência 41-42 pp.64-79. Instituto de língua portuguesa, Rio de Janeiro.,査読有り

[学会発表] (計 9 件)

①岸本恵実, 2014 年 10 月 12 日, 羅葡日辞書から日葡辞書へ一きりしたん版辞書にみるイエズス会の日本語語彙研究— 天理きりしたんワークショップ, 天理大学 (奈良県・天理市)

②Kishimoto, Emi. 2013, “Who compiled Japanese-Portuguese/Portuguese-Japanese dictionaries in the 16-17th centuries in Japan?” The 19th Biennial Meeting of the Dictionary Society of North America, May 23, 2013, University of Georgia, Athens, U. S. A.

③Kishimoto, Emi, 2012, Two Latin dictionaries compiled by the Jesuits in Japan: “Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum” and “Vocabulario Lusitanico Latino”, International Society for Historical Lexicography and Lexicology, Friedrich-Schiller-Universität, 2012 年 7 月 26 日,

④Toyoshima, Masayuki, 2011, Fazer ligações entre dicionários históricos online, e manter bases-de-dados distribuídos (Simpósio sobre a historiografia linguística, , 2011.9.30, CEDOCH, Universidade de São Paulo, Brasil) (招待発表)

⑤Toyoshima, Masayuki, 2011, Arquivos digitais japoneses para a pesquisa da historiografia linguística (Simpósio internacional “Estudos japoneses na América Latina : Diálogos, perspectivas e projetos conjuntos”, 2011.9.26--30, Associação brasileira de estudos japoneses (ABEJ), Centro de estudos japoneses, São Paulo, Brasil), 2011.9.29, Memorial da América Latina, São Paulo, Brasil (招待発表)

[図書] (計 3 件)

①豊島正之編, キリシタンと出版, 2013 年, 350+20pp., 八木書店 (第 35 回日本出版学会賞[2014 年]受賞)

②Carlos Assunção, 豊島正之、天草版ラテン文典, 635pp., 2012. 8. 25, 八木書店 (日本学術振興会科学研究費「研究成果公開促進費(学術図書)」助成出版)

③折井善果・白井純・豊島正之、『ひですの経ハーバード大学ホートン図書館所蔵』、八木書店、p. 386、2011

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
出願年月日 :  
国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
取得年月日 :  
国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

<http://joao-roiz.jp/LGRP/>,  
<http://joao-roiz.jp/LGR/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

豊島正之 (TOYOSHIMA, Masayuki)

上智大学・文学部・教授

研究者番号 : 10180192

(2) 研究分担者

丸山徹 (MARUYAMA, Toru)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号 : 40165949

岸本恵実 (KISHIMOTO, Emi)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号 : 50324877

白井純 (SHIRAI, Jun)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号 : 20312324

(3) 連携研究者

なし